

ミルトンの『復樂園』第二卷翻訳

森谷峰雄

〔抄録〕

ヨルダン川の東岸で、洗礼者ヨハネによって洗礼を受けたイエスは、天から声によって、神の御子として宣言される。そして、直ちにユダヤ地方の荒地に追いやられ、そこ四〇日間サタンから誘惑を受けた。ヨハネから洗礼を受けた人々は、その間、イエス

スの不在によりて大いに、懸念を催す。

キーワード 洗礼者ヨハネ、神の御子、聖霊、ヨルダン川、

聖母マリヤ、荒野の誘惑。

まえがき

ミルトンがなぜ『復樂園』を作詩したのか。一般的には、一人の青年にそう要請されたのが原因であるとされる。伝記的事実に照らし合わせれば、それは確かなことであろう。樂園の回復には、何が必要であったのだろうか。これは、次の事実が示すところである。『失樂園』においては、その主要テーマであるが神に対する人類の不従順が樂園喪失の原因であった。故に、樂園の回復はこの逆の方向に行けばよいのである。即ち、『復樂園』のテーマは、神への従順であるはずである。原罪を負う人間は誰一人として、従順に耐えることはできない。

これが出るのは、神の言葉が受肉し給うた神の御子だけである。彼は、人として又、神として、存在する。ゆえに、ミルトンは徹底して、『復樂園』におけるテーマとして御子による完全なる従順を選んだのである。キリスト教における人類救済の唯一の手段は、十字架における御子の磔による死の贖罪であるという。つまり、それは基督の十字架の血潮による罪の贖いである。それでは、ミルトンはこの十字架の贖罪に焦点を置くべきではなかったのか。ここに大きな神学的問題が生じる。後者には、最近ヒットした映画『パッション』が徹底的に取り上げている。この作はミルトンのこの作品と対照的であり、その意味において、両者は相補的關係にあると言えよう。

最近、訳者はキリストスの救いの新たな真理を悟りつつある。次は訳者のヨハネ伝において把握したキリストスの救済論の概要である。

ヨハネ書が伝える基督は、犠牲愛の基督ではない。神への従順の結果、死を滅ぼした勝利の主としての基督である。それが故に、ジョン・ミルトンは『復樂園』において、ゴルゴタ丘の十字架の基督の血を主題とせず、サタンの誘惑に勝利し給うた荒野の誘惑の場面を選んだのである。これは人の原罪がアダムの神への不従順にあるという考えの下になされたものである。もとより、基督信仰の中心は十字架にある。しかし、十字架の血はキリストスのサタンに対する勝利の結果生じたのである。キリストスの血そのものには救いはない。もし、荒野において、サタンの誘惑に敗北した後、十字架の血が流されても意味がない。サタンに敗北し、その結果罪に汚れた血がたとえ十字架のキリストスから流されたとしてもそれは、救いにならない血である。逆に、キリストスが荒野の誘惑に勝利し給うた後に、たとえ、十字架にかかることなく昇天されても、救いはあるのである。人は、キリストスを神の御子として、これを心から受納し、慈しみを愛することによって、救いを得る。しかし、実際基督は十字架に死なれ、自ら血を流させ給うた。これは、神の深い叡智によるものである。それは、キリストスは死して、黄泉に降り、そして、生きて今は亡くなった人々も含めて、全人類にこの喜ばしきおとずれを伝え、救われるべき人に救いをもたらすためであった。

この救済論は実にミルトンの『復樂園』のそれであることは、前述から明らかである。

ミルトンの『復樂園』を日本語に翻訳する理由が三つある。その一番大きい理由は、右に述べた基督の救いの本質論に係る。第二は、ミルトン研究者として、この作品は未踏の領域であることである。せっかく『失樂園』まで終えたのに、この作品を取り残すわけには行かない。第三は、本学の旧英文学科の初代学科長故才野重雄氏がミルト

ン研究者であり、今、翻訳者は本学を定年退職で、本年限りでこの職を去るに際して、故才野教授への思い出したいと、思ったことである。

思えば、訳者が本学に赴任したのは、今から、三十六年前になる。爾来、ミルトン研究に励んできたのであるが、才野先生の遺産を引き継いで、本学科の伝統学問の一領域となすには至らなかった。才野重雄先生は、神戸大学等で、文学部長をなさった方である。又、ミルトンは米国や英国等の英文学研究界では、中心的存在ではある。英米の英文学科ではミルトン研究は盛んである。本学において、ミルトン研究が栄えなかったことには、訳者の非力によるところ計り知れないが、しかし一方において、その最も大きい理由は宗教的なものであると言わざるを得ない。英文学科において、ミルトン研究者がいて、ミルトン研究が栄えないところは、本格的英文学科とは言えない。ところで、今、初代学科長から現在の学科長を知っているのは、訳者一人になってしまった。その訳者も本年度で、本校を去ることになり、時代の推移を思う。

第2巻

一方、洗礼を受けたばかりの人々は、まだ、ヨルダンの「洗礼者」のところに留まっついていて、イエス・メシアとはつきりと呼ばれ、神の御子と宣言されたのを聞いたばかりの方に会った。

そして、その高い権威を信じた、
(五)

そして、彼と共に話をした、そして、彼のところに宿泊した、つまり
アンデレとシモンで、知られて後、有名となった、(訳注)

他の人々と共に、尤も聖書には名前が載っていないけれども—
今、彼を見失い、彼等が最近見出した彼等の喜びを、
つい最近見出したが、急に消えて、
(一〇)

疑い始めた、そして、何日も疑った、
そして、日数が増すにつれて、彼等の疑いも増した。
時々彼等は思った、彼は姿を見せたが

それもつかの間で、神のところに揚げられた、と。丁度、かつて、
モーセが山に入つて長い間行方が知れなかつたように、
(十五)

そして、又、偉大なチシバイトが、火の車に乗つて天へと
上つて行つたように。それでも、彼はもう一度、来ることになつてゐる。

それ故に、若い預言者達は、それで、注意して、
失つたエリヤを求めたように、そのように、それぞれの場所で、
ベタバラに近い場所—棕櫚の町
(二十)

エリコ、イーン、そして古いサレム、マケラス、
そして、広いゲネサレ湖のこちら側にある

それぞれの町あるいは壁のある都市で、
或いは、ペレアで—しかし、空しく、帰つて来た。

それからヨルダンの土手の上に、小川の側で、
そこでは風が葦やコオリヤナギと囁きながら戯れる、
質素な漁師達(彼等をより偉大な人と呼ぶなかれ)は、
(二十五)

みずばらしい小屋の中で、共に身を寄せ合い、
彼等の予期しない損失と悲しみを注ぎ出した—
(三十)

「ああ、私達は、何という高い希望から、何という不慮の
逆戻りへと落ちたことか！私達の目は、
大変長い間、私達の先祖が待望してきた
メシアがその時来るのを確かに見た。私達は恵みと
真理に溢れた彼の言葉、彼の叡智を聞いた。
『さて、さて、確かに、救済は近づいた、
王国は、イスラエルに回復されるであろう。』
このように、私達は喜んだ。しかし、私達の喜びは
困惑と新しい驚きに変わった。
このように、私達は喜んだ。しかし、私達の喜びは
困惑と新しい驚きに変わった。
というのには彼はどこへ行かれたのだろうか？どんな事故が
彼を私達から包み隠したのだろうか？彼は、御出現後
退かれて、再び、私達の期待を
長引かせるだろうか？イスラエルの神よ、
汝のメシアを送り給え。時は来ました。
地上の諸王をご覧下さい、いかに彼等は汝の
選民を圧迫していることでしょうか、彼等の不義の
権力を何という高さにまで高めたことでしょうか、そして、汝への畏れを
彼等の背後に投げ捨ててしまいました。立ち上がり、汝の栄光の
正しさを立証して下さい。汝の民をそのくびきから解放して下さい！
だが、待てよ。神は、これまで、成し遂げて下さった—
彼の「油注がれた者」を送り、そして、私達に彼を啓示された。(五十)

『さて、さて、確かに、救済は近づいた、
王国は、イスラエルに回復されるであろう。』
このように、私達は喜んだ。しかし、私達の喜びは
困惑と新しい驚きに変わった。
というのには彼はどこへ行かれたのだろうか？どんな事故が
彼を私達から包み隠したのだろうか？彼は、御出現後
退かれて、再び、私達の期待を
長引かせるだろうか？イスラエルの神よ、
汝のメシアを送り給え。時は来ました。
地上の諸王をご覧下さい、いかに彼等は汝の
選民を圧迫していることでしょうか、彼等の不義の
権力を何という高さにまで高めたことでしょうか、そして、汝への畏れを
彼等の背後に投げ捨ててしまいました。立ち上がり、汝の栄光の
正しさを立証して下さい。汝の民をそのくびきから解放して下さい！
だが、待てよ。神は、これまで、成し遂げて下さった—
彼の「油注がれた者」を送り、そして、私達に彼を啓示された。(五十)

選民を圧迫していることでしょうか、彼等の不義の
権力を何という高さにまで高めたことでしょうか、そして、汝への畏れを
彼等の背後に投げ捨ててしまいました。立ち上がり、汝の栄光の
正しさを立証して下さい。汝の民をそのくびきから解放して下さい！
だが、待てよ。神は、これまで、成し遂げて下さった—
彼の「油注がれた者」を送り、そして、私達に彼を啓示された。(五十)

選民を圧迫していることでしょうか、彼等の不義の
権力を何という高さにまで高めたことでしょうか、そして、汝への畏れを
彼等の背後に投げ捨ててしまいました。立ち上がり、汝の栄光の
正しさを立証して下さい。汝の民をそのくびきから解放して下さい！
だが、待てよ。神は、これまで、成し遂げて下さった—
彼の「油注がれた者」を送り、そして、私達に彼を啓示された。(五十)

選民を圧迫していることでしょうか、彼等の不義の
権力を何という高さにまで高めたことでしょうか、そして、汝への畏れを
彼等の背後に投げ捨ててしまいました。立ち上がり、汝の栄光の
正しさを立証して下さい。汝の民をそのくびきから解放して下さい！
だが、待てよ。神は、これまで、成し遂げて下さった—
彼の「油注がれた者」を送り、そして、私達に彼を啓示された。(五十)

彼の偉大な「預言者」によって指し示され、公然と証明された。そして私達は、彼と会話をした。

このことを喜ぼうではないか。そして、私達はすべての恐れを彼の摂理に任せた。彼は私達の期待を裏切らず、

又、神は、今、彼を取り消しなさらず、召還なされず——（五十五）
祝福されたその姿で私達を嘲られず、ここから彼を強奪なされない。私達の希望、私達の喜びはもうすぐ戻るでしょう。」

このように、彼等は、最初は求めもしなかつた御方を見い出すという新しい希望を、悲嘆の中から取り戻す。

しかし、他の人々は洗礼から戻ったが——（六十）
彼女の「息子」は戻らず、ヨルダンにも残らず、彼に關する報知もないのを知った時、

胸の内は平静ではあり、胸の内は純粹であつたが、母親としての懸念と恐れとが頭をもたげて、煩いと思いを起こし、それを、ため息混じりにこのように表現した。——（六十五）

「おお、神によつて身ごもるといふあの高い名譽や、『万歳（ハレルヤ）、祝福された女達の中で大いに恵を受けました！』

あの挨拶は今となつては、私に何の役に立とう、私は悲しみに対しても同じように高められていて、私が生んだ子供によつて、（七十）

他の女性の運命以上に、恐怖が大きいのに。
冷たい風から彼や私を守ってくれる

小屋が、殆ど手に入らないような

そのような季節に生まれた。馬小屋が私達の暖で、飼ひ葉桶が彼の暖でした。それでも、まもなく、そこから（七十五）

エジプトへの逃亡を余儀なくされました。ついに、人殺しの王は死にました。彼は、息子の命を求めた、そして、彼を逃すと、ベツレヘムの街路を幼児の血で満たした。

エジプトから家に戻りました。ナザレが
長年の私達の住処となりました。彼の生活は、（八十）
内輪で、活動なく、静かで、瞑想的でしたので、

どのような王にも嫌疑は殆どなかつた。しかし、今、一人前に成長し、私の聞くところ、洗礼者ヨハネによつて、

認められ、公然と、証明され、彼の天父の声によつて、天から御子として認められました。

私は、何か大きい変化を探しました。名譽への？いいえ、（八十五）
そうではなくて、困難へのです。老シメオンが明白に預言したように、

彼はイスラエルの多くの人々の興亡につながり、不名譽な印につながるでしょう——私のこの魂そのものを

劍が貫通するでしょう。これが私の恵まれた運命、（九十）
私の苦難への高い昇進なのです！

私は苦しめられるように見えるけれども、祝福されている！

私はそれに対して言い争わない。或いは、愚痴をこぼさない。しかし、彼はどこで今手間取っているのか？ 何か大きい意図が

（九十五）

彼を隠している。彼が十二歳になったばかりの頃、

私は彼を失いましたが、見つけました。彼は自らを失う筈はなく、

彼の天父の任務に出かけていたことを、私は知っていた。

彼が何を意図したかを、私は思案しました――

後になって理解します。彼は、遙かに長い今度の不在、 (二〇〇)

こんなに長い不在を何かの大きい目的の為に、明かさない。

しかし私は忍耐を以て待つことに慣れていて、

私の胸は、不思議な出来事の予兆となる

事柄や言葉で一杯の倉庫でした。」

このようにマリアは、しばしば考えあぐね、 (二〇五)

彼女が最初に挨拶を聞いて以来起こり、目立った事柄を、

しばしば心に思い出し、柔和な落ち着いた思いで、

その成就を待った。

その一方、彼女の息子は、荒野を辿り、

一人で、だが、非常に聖なる瞑想で養われ、 (二一〇)

自らの心深く沈静した。そして、同時に、

やがてやってくる彼のすべての偉大なる仕事を想像する――

地上にいる間の目的にして高いその使命を、

最善に如何にして始めるか、如何に達成するのか。

というのは、サタンは、戻ってくるという狡猾な前置を後に、 (二一五)

彼を一人にして去り、急いで、厚い空中の

中央部へと昇ってきたからだ。

そこでは、彼のすべての「勢力者達」が会議に座していた。

そこで、自慢の陰もなく、或いは、喜びの様子もなく、

案じ顔で、うつろに、彼はこのように始めた。―― (二二〇)

「諸侯よ、天の太古なる子孫達よ、靈妙なる王座達よ、

今は悪霊となり、それぞれの割り当てられた

統治の要素から、より正しくは、

火、空気、水、及び、地下の諸権力達と呼ばれる者達よ、

(新たな問題を起こさず、我等が我等の場所、これらの穏和な座を

保持することができるよう！)――我等を地獄へと (二二五)

追放しようと脅かす敵が、我らを

侵略しようとして起こったのだ。

私は、約束したたように、そして満場一致の

投票により、権力を与えられて

彼を見つけ、彼を検分し、彼を吟味したのだ。しかし、 (二三〇)

もし彼が、少なくとも、母方によって、

「人」であるならば、私がこの「人」には遙かに劣る

人類の初めであるアダムを扱った時より

遙かに他の苦勞が予想されると知る、

尤もアダムは彼の妻の魅力によって倒れたのであるが。 (二三五)

天からの人間以上の天賦の才で飾られて、

絶対的な完成、神々しい恵み、

そしていと大いなる行為に対する精神の広さ。

それ故に、私は戻ってきたのだ、「楽園」における

(二四〇)

イブに対する私の成功への自信が、
ここでの同じ成功の過信へと汝等を

騙すことがないように、私が全ての者を召集するのは
最初は私に匹敵するものはないと思ったこの私が
今、出し抜かれないうちに、手筈を整える、

(一四五)

又は、援助の知恵を以て準備するためなのだ。」

このように訝りつつ、年古した「蛇」は語った、すると、全会衆から、
彼の求めるままに、彼等の最高の助力が、雄叫びと共に、
保証された。その時、彼等の中央から、ベリアルが

(一五〇)

立ち上がった。彼は、墮落した最も放蕩な霊体で、
最も好色的であった。そして、アズモダイに次いで、
最も肉欲的な魔男であった。そして、このように忠告した。

「女達を彼の目の中に、彼の行く道に置けよ、

人の娘達の中で、一番の美人を。

(一五五)

あらゆるところに多くの絶世の美女がいる

正午の空のように、人間よりも

女神により似ている女、優雅で控え目な、

色事に長けて、魅惑する舌

(一六〇)

人をうなずけさせる、処女の威厳、穏和で
甘美な和らぎ、それでいて近づき難く、
退くのが上手で、引きさがりながらも、その後
心を引き寄せて、色事の網にもつれさせる。
そのようなものは、非常に厳しい氣質を和らげ

飼い慣らせ、非常に無骨な額をなだめ、
最も男らしく最も決意の堅い心を弱め、
好色的の希望によって、溶かし、騙されやすい欲望によって、
惑わし、そして意のままに導く。

(一六五)

丁度、磁石が非常に硬い鉄を引きつけるように。

女達は、他の物はそうしないのに、非常に賢明な

ソロモンの心を騙し、彼に妻達の神々を
建てさせ、それらに頭を屈めさせたのだ。」

(一七〇)

彼に対してサタンは、このように即答を返した。――

「ベリアルよ、汝は非常に不規則な秤で、汝だけで、

他のすべてを計る。老齡の故に

汝自身女性達を溺愛し、彼女等の容姿、
彼女等の色や魅力的な優雅さを賞賛する、

(一七五)

汝は思う、誰もそのような玩具に惚れ込まない者はいない、と。

大洪水の前に、汝は、汝の好色な仲間、

偽の神の息子達と共に、地上をさまよひ、

人間の娘達に淫らな目を投げかけて、

(一八〇)

彼女等と結ばれた。そして、ある民族を産んだ。

我々は、見なかったか、話によって聞かなかったか、

宮廷や王室の中に如何に汝は潜むかを。

森や木立の中に、苔むす泉のほとりに、溪谷や

緑なす牧場において、希なる美女を
待ち伏せする、カリスト、クリメネ、

(一八五)

ダフネ、或いは、セメレ、アンチオパ、

或いは、アミモネ、シリリンクス、更に多くは、

長すぎる。それから、アポロ、ネプチューン、ジュピター、

又はパン、ファウン、又はジルバンの慕われた名に

悪戯をしただろう？だが、これらの巢窟が、

すべての者を喜ばすのではないのだ。人間の息子達の中には

いかに多くの者が、笑って、美女とその誘惑とを軽視し、

容易に彼女の攻撃を軽蔑したことか、

より価値ある事柄に熱心であるからだ！

思い出せ、あのペラの征服者、

若者の時、東洋のすべての美人を、

彼は軽んじた、そして見過ごした。

いかに、アフリカとあだ名された彼が、

若い盛りの頃、美しいイペリアの少女を無視した。

ソロモンと言えば、彼は安逸に生きた。そして、名譽

富、豪華な食事に満ちていたが、それは彼の地位を楽しむ

以上のより高い計画を越えて意図されたのではない。

それ故に、女性の餌に曝されたのだ。

しかし、我々が試みる者は、ソロモンよりも

はるかに賢く、もつと高貴な精神の主であり、

最も偉大なことの達成の為に、完全に

精神を打ち込んでいる。どんな婦人達をお前達が見出そうとも、

彼の暇は、愚かな欲望の目をかたじけなくも

与えるであろうか？或いは、彼女は自信に満ちて、

美の王座の上に崇拜されて座す女王のように、

誘惑するために、彼女のすべての愛嬌ある魅力に包まれて、

降りて来るだろうか、かつて、ビーナスの帯が

ジヨブにその効果を及ぼしたように（そのように伝説は語る）、

人は、いかに、その威厳のある額から、

「徳」の丘の頂の上に座すかのように、

軽蔑して彼女を当惑させ、彼女の女としての誇りである、

衣装をすべて打ち負かし、落胆させる、或いは、

敬虔な畏れに向かわせるだろうか！というのは、美人は

虚弱な精神にしか、賞賛されないし、

虜にされないからだ。誉めるのをやめよ、そうすれば

すべての突然のみくびりに大いに恥じて、

彼女のすべての羽は光沢を失い、ささいな子供騙しに落ちる。

それ故に、我等はより男らしい対象で、彼の貞節を

試みなければならない、例えば、価値や

名譽、栄光、そして、大衆の賞賛により大きくみえるもの

(非常に偉大な男達がその上で非常にしばしば難破した岩石、

或いは、自然の合法的願望を満足させ、それ以上を越えないもので。

そして今、確かに彼は、食べ物が無い広い荒野で、

(二〇五)

(二〇〇)

(一九二)

(一九〇)

(二一〇)

(二一五)

(二二〇)

(二二五)

(二三〇)

飢えている、彼は飢えている。

あとのことは私に任せよ。わたしは、いかなる

利点も見逃さない。そして、彼の力をできるだけ試そう。」

彼は語り終えた。そして大歓呼の中で彼等の承諾を聞いた。(二三五)

それから、直ちに、悪巧みにおいて自分自身に似た

選ばれた一隊の霊体達を彼のところに連れてくる。

手近にいて、彼の指図に現れるように。

もし大義が、様々な人々の何らかの活動の場面を

展開することなれば、それぞれは自分の役割を心得る。

それから彼はこれらの者達と共に、砂漠へと赴いた。

そこでは依然として、陰から陰へと、神の御子は、

四十日の断食の後に、まず、飢えたままだった。

さて、飢えが先ず、そしてこのように呟いた。――

「これはどこで終わるのか？一〇に四倍の日数を私は過ごした。

(二四〇)

この樹木の茂る迷路をさ迷い、人間の食べ物を

食べてこなかった、食欲もなかった、断食に徳がある

訳ではない、或いは、ここで私が苦しむことが

重大である訳でもない。もし自然が必要としないならば、

或いは、神が食事なくして自然を支えるならば、

食事は必要ではあるが、耐えることに賞賛があるろうか？

しかし今私は飢えを感じる、それは自然は自然が求めるものを

必要としていることを宣言する。だが、神は

(二五〇)

何か他の方法でその要求を満たし給う、

空腹は依然として残るけれども。そのように残るが

この体の消耗がなければ、私は満足する、

そして、飢えの刺から来る害を恐れない。

私の天父の意思を果たそうとする方をより多く飢える私を

養うより善い思いを食しているの、それを気に留めない。」

時は夜であった。このように御子は沈黙の

歩みの中で、心を通い合わせる。

それから、木々の厚く絡み合う、

近くの快適な藪の下に、身を横たえ、そこで彼は眠り、

そして夢を見た、飢えた者が常に夢見るように、

食べ物や飲み物、自然の甘美な食事の夢を。

彼は、ケリトの小川のほとりに立っている、と思った。

そして、節くれ立ったくちばしの大ガラスが、朝な夕なに、

食べ物エリヤに運んで行くのを見た――

カラスは非常に空腹であったが、運ぶ物を避けるように教えられてい

た。

彼は又預言者をも見た、彼がいかに砂漠へと

逃げて行つたか、そして、そこで彼はネズ木の下で

如何に眠つたか。それから、彼はいかに目覚め、

石炭の上に彼の夕食が準備されているのを見た。

そして、天使によって、起きて食べるように命じられた、

そして、休息の後に食するのは、二回目である、

(二七五)

(二七〇)

(二六〇)

(二六五)

その力は彼には四〇日、十分であった。

時々、彼はエリヤと共にそれを食べた、

或いは、客人として、ダニエルと共に彼の野菜を食べた。

このように、夜がゆつくり過ぎた。そして、今、おふれ役の雲雀が

その地面の巣から出て、高く舞い上がり、朝の訪れを

見出し、その歌で朝に挨拶する。

我々の救世主がその草のベッドから軽く身を起こした時、

すべてが夢に過ぎないと知った。

彼は食えずに眠りにつき、食えずに目覚めた。

まもなく、丘の上へとその歩みを上げた、

その高い頂から、周囲の眺望を見知り、

もしや羊の小屋が、或いは家畜の群が小屋が目に入らないかと。

しかし、小屋も、群も、或いは、羊の小屋も、彼には見えなかった―

ただ、溪谷に楽しい小森が見えた、

調べよい小鳥達の歌が声高く響いていた。

彼は、正午になれば、そこで、休息しよう、と心に決めて

そこに向かった。そして、すぐに、高い屋根の木陰に入った、

そして、その下を歩く。そして、ほの暗い小道を。

それは、木の多い光景の真ん中で開いていた。

それは、自然自身の業のように思えた（大自然は芸術を教える）、

そして、迷信深い目には、森の神々や森の妖精の

たまり場に思えた、彼はその周りを見た。

その時、突然一人の人間が彼の前に立った、

前のように田舎者ではなく、もっと良い身なりであった、

都会或いは宮廷或いは宮殿で育った者のようであった。

そして、魅力的な弁舌で彼に次の言葉を語った。―

「差し出がましいですが、お許しを戴いて、私は戻ってきたのです。

ですが、神の御子ともあろうお方が、この野蛮な孤独の中で

随分長い間、万物に不自由しながら、お待ちになるのは、

もっと不可解千万です。そして、御空腹もおありのことかと、（三〇五）

充分知っております。有名な他の人々は、

物語にありますように、この荒野を踏みました。

難民の奴隷の女は、追放された彼女の息子ネバイオツと共に、

ここで、施す天使によって、

救援を見い出しました。イスラエルのすべての民族は

ここで飢えたでしょう、もしも神が

天からマナを降らさなかったなら。そしてテベツ生まれの

あの大胆な預言者は、ここでさ迷った時、食べなさいとの

招く声によって、二度養われました。

これらの四〇日、誰もあなた様を構う人はなく、

本当に、ここで、四〇日以上捨てられました。」

イエスは彼にこの様に答えられた。―「それでお前の結論は？

彼等は皆困窮した。だが、私はお前の見る通り、困っていない。」

「それならお飢えは如何なさいますか？」とサタンが答えた。

「もしも、食べ物があなた様の前におかれますと、

お食べになりますか？」それは、施す者を私が好むかどうかによる、」とイエスは答えた。「何故、それが

あなた様の拒絶の原因となるのですか？」と狡猾な敵が言った。

「あなた様には全ての被造物に対して権利はないのですか？

全被造物は正しい権利によって、義務と奉仕を
(三三五)

あなたに負っていないのですか、又、命令されるまで待たずに、
彼等はそのすべての力を差し出すべきではないのですか？

私が申し上げるのは、律法により汚れた肉、又は、最初に、

偶像に捧げられた食べ物―若いダニエルなら避けることができます。

又、敵によって進呈された食物―を言うのではありません―尤も、

(三三〇)

欠乏に圧迫されると、誰がそれをためらうでしょうか？ご覧なさい、

あなた様が飢えられたので、自然は恥じて、

或いは体裁よく言えば、戸惑って自然界から、

その最良の蓄えを提供し、その主としてふさわしく、

名誉を以て、あなた様をもてなすのです。
(三三五)

御願いですから、どうか、お座りになって召し上がって下さい。」

彼は夢を語らなかつた。というのは、彼の言葉が終わると、

我等の主は目を上げると、一番広い木陰の下で、

広々とした場所に、王に相応しい流儀で、

非常に高貴でよい香りのする食物が豊かに広げられた
(三四〇)

食卓が見えた―獵獣、或いは、獵鳥が

パイ風に盛りつけられ、或いは、焼き串から、又は茹でられたり、

竜えん香で蒸されている、海や沿岸、川又は
せせらぐ小川からとれた、全ての魚、
殻のあるもの鱗のあるもの、

そして、上品な名前のもの。そのために、黒海、
(三四五)

ポツオリイ湾、アフリカの沿岸が干された。

ああ！イブを迷わしたあの自然のりんごは、これらの

ご馳走に較べると、どんなに質素でしょうか！

そして蔽めしい食器棚に、よい香りを発散した

葡萄酒の側に、整然と背の高い若者達が、
(三五〇)

ガニメデやヒラスよりも美しい色合いの

豊かな衣装を身につけて立っていた。もつと遠くに、

木々の下で、アマルテアの角から実った果物や

花を以て、ダイアナのお供の妖精達や水の精達が、
(三五五)

軽やかにステップを弾んだり、蔽かに佇んだ。

そして、昔から想像され、或いは、爾来の伝説よりは

より美しく見えた、ヘスペリデスの貴婦人達、或いは、

妖精の貴婦人達が、広い森の中で、ログレスの、

或いは、リオネスの、或いはランセロットの、
(三六〇)

或いはペラスの、或いはペネロレの騎士と出会う。

そしてその間中、調和の取れた弦又は

魅力的な笛の調べよい旋律が聞こえてきた。そして、優しい

風がアラビヤ風の香りと早春の香りを、その

優しい翼からおおぎたてた。

(三六五)

そのような豪華さであった。そして、誘惑者は今、彼の勧誘を熱心に繰り返した。――

「神の御子が座って食べるのになぜ戸惑いなさるのですか？

これらは禁断の木の実ではありません。どんな禁制も

これらの純粹の珍珠に触れることを止めません。」 (三七〇)

それを味わっても、知識、少なくとも、悪知識を生むことはありません、命を保持し、命の敵である飢えを

甘美な回復の喜びで滅ぼします。

これらのすべては、空気、森、そして泉の精華です、

あなたさまの優しい仕えの者は、あなた様に敬意を払い、 (三七五)

あなた様を彼等の主と認める為に参ります。

何をお疑いなさるのですか？ 神の御子よ。座ってお食べ下さい。」

サタンに対してこのようにイエスは穏やかに答えた。――

「お前は、私が万物に対して権利を持つ、と言うのか？

そして、誰がその権利を使用する私の力を妨げるのか、と。 (三八〇)

私の好みのままに、いつでも、命令できるものを、

施しによって、受け取る、と。

私は意のままに、なすことができる、疑うな、お前がしたように

この荒野の中に食卓が現れる様に命令し、

栄光のうちに勢ぞろいした使いの天使達の一群に、 (三八五)

私の食事に仕えさせるように、素早く呼ぶことができる。

ならば、お前は、このように、空しく、奉仕精励を

それが受け入れられないところに、無理強いするのか？

しかも、私の飢えとお前には何の関係があるのか？

お前の豪華で美味な馳走を私は非難するのだ、 (三九〇)

そして、お前の見せかけの施しを策略と見なすのだ。」

御子に対して、サタンは、氣に入らずこのように答えた。――

「あなた様には、私にも施す力があることをお分かりです。

私が好む者に与えたかも知れないものを、自から進んで、

その力によって、あなた様に差し上げ、 (三九五)

ここで、喜んで、おりよく、

あなた様の明白な困窮に応じますならば、

なぜ、受け取らないのですか？しかし、私には分かります、

私が為したり提供できることが、疑わしいのです。

その苦労によって遠くから運ばれた戦利品を得た他の者なら (四〇〇)

これらのご馳走を素早く平らげるでしょう。」そう言うと同時に

ハーピの翼とかぎづめの音が聞こえて、

食卓も食物も全部消えた。

ただ、執拗な誘惑者だけが留まっていた。

そして、次の言葉で、彼の誘惑を追求した。―― (四〇五)

「他のすべての生き物を統御する空腹によっても、

あなた様は、統御されない、それ故に、動じられない、

あなた様の誘惑は、その他においても無敵です。

というのは、あなた様にはいかなる誘惑も食欲に屈しないからです。

そして、あなた様の心はすべて高い意匠に、高い行為に (四一〇)

定まっています。しかし、何を以て遂げるのですか？

偉大な行為は、偉大な企ての手段を要します。

あなた様は、名を知られておらず、友もなく、卑しい生まれの者、あなた様の父君は大工と知られており、あなた様自身は、家庭で貧困と困窮の中にお育ちになった。

（四一五）

ここで、砂漠の中で迷い、空腹にさいなまれておられる、どのような方法で、どのような希望から、あなた様は偉大さを

お求めになるのですか？どこから、権威をお引きなさるのですか？

どんなお供がおられるのですか、どんな従者を得られるのですか？

又は、あなた様が、自費で賄いきれないほど長い列の

（四二〇）

思慮のない群衆を獲得して、あなた様の踵にかしづかせるのですか？

お金は名譽や友人や征服、そして、王国をもたらせます。

エドム人アンチパテルと彼の息子ヘロデを、

あなた様の王位であるユダの王位に上げたのは、

彼に有力な友人を得させた黄金でなくして何でしょう？

（四二五）

それ故に、もしも、偉大な事柄を達成なさろうとされますならば、

先ず、富を得なさい、そして宝を積みなさい―

難しくはありません、もしあなた様が私に従って下さるのでしたら。

富は私のものです、財産は私の手中にあります。

私がひいきする者は大いに富が増える、

（四三〇）

徳、活力、知恵が不足していても。」

サタンに対して、イエスは忍耐強くこのように答えた。―

「だが、これら三つがない富は、支配権を

獲得したり、それを保持するに無力だ。

地上の古代の帝国を見よ、

（四三五）

彼等の隆盛極める富のさなかに、崩壊したのだ。

しかし、これらを付与された人々は、しばしば、最貧の中で、

最高の行為を達成したのだ―

ギデオンとエフタ、そして、羊飼いの若者

その子孫は多くの年数ユダの王位に座した、そして、

（四四〇）

その王座を再び獲得するであろう、そして、

限りなくイスラエルを統治するであろう。

異教徒たちの間で（というのは、世界中で、記念に

値するもので、私が知らないものはないからである）

お前は思い出すことができるか、

（四四五）

クインチヌス、ファブリキウス、レギュラスを？

というのは、私はこんなにも貧しい人々の名前を尊敬するからだ。

彼等は、偉大なことをなすことができた。そして、王の手から

申し出られても、富を難ざることができた。

そして、この貧困の中にも、彼等が為したこと、恐らく

（四五〇）

より多くを、素早く、達成することが出来ないのは、

私において何が欠けているように思われるのか？

だから、富を礼賛するな。それは、愚者の落とし穴であり、

賢者にとって、わなでなくとも、厄介物である。それは、何か

賞賛に値するところを行わせるように促すよりは、

（四五五）

徳を緩ませ、その刃先を鈍らせる。

同じような反感で、私が富や王国を

拒絶したらどうか？それでも、王冠は、

見た目に黄金であるが故ではなく、荊の花冠に過ぎず、

王冠をかぶる者に、

危険や問題や心配や不眠の夜をもたらす、

その双肩に、すべての人の重荷がかかる時。

というのは、王たる者の任務は、民衆のために、

このすべての重荷を担うことにあるからだ。

それが、王の職務、名譽、徳、長所、そして主な賞賛なのだ。(四六五)

だが、自分自身の内側で統治し、情念

欲望、恐怖を支配する者もつと王らしくある――

それはすべての賢明で有徳の者はそれを獲得するもの。

そしてそれを獲得しない者は、人々の都市

或いは強情な群衆を支配しようとしてもうまくいかず、

内側の無秩序に、或いは、彼の中の無法の

情念に屈し、それに仕える。

しかし、救済教理によって、国民を真理の道に導くこと、

そして、誤りから神を知るように導き、知ったならば、

正しく礼拝するように導くことの方が、

もつと王らしい、このことが魂を引きつけ、

内的人間を、より気高い部分を支配するのだ。他は体だけしか治めない、

しかも、しばしば、強制的に――このことは、寛大な精神にとつて、

そのように治めることは、純粹な喜びである筈はない。

その上、王国を与えることは、取ることよりも

(四六〇)

より偉大でより高尚であり、捨てることは、

遙かに気高いことであると考えられてきた。

だから、富は必要でない、それ自らにとつても、

それらが求められるお前の理由にとつても――

笏を得ることは、避けた方がもつとよいのだ。」

(ミルトン作『復樂園』第二巻第訳完了)

(四八五)

【訳注】

ミルトンは、洗礼者ヨハネの活動期の出来事として、次のように歌っている。

イエスス・メシアとはつきりと呼ばれ、

神の御子と宣言されたのを聞いたばかりの方に出会った。

そして、その高い権威を信じた、

そして、彼と共に話をした、そして、彼のところに宿泊した、つまり

アンデレとシモンで、知られて後、有名となった、

他の人々と共に、尤も聖書には名前が載っていないけれども――

(五)

ここで、ミルトンはイエスス・メシアの所に宿泊した者として二人に「アンデレとシモン」を挙げていますが、ヨハネ書では「イエスについて行つたふたりのうちのひとり」は、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった」と書いている。そして、他の弟子の名前は明らかにしていない。これは、ヨハネ書の著者ヨハネの真の謙遜を示す態度である。自分の名前を自己の作であるヨハネ伝に残さないのは、ヨハネがイエスによって、名譽欲に対する戒めを受けたためである。ミルトンが

「誤って記した「シモン」は正確には「ヨハネ」である。この史的事実を示すヨハネ伝から引用する。

【口語訳】ヨハネ一章

その翌日、ヨハネはまたふたりの弟子たちと一緒に立っていたが、イエスが歩いておられるのに目をとめて言った、「見よ、神の小羊」。そのふたりの弟子は、ヨハネがそう言うのを聞いて、イエスについて行った。イエスはふり向き、彼らがついてくるのを見て言われた、「何か願いがあるのか」。彼らは言った、「ラビ（訳して言えば、先生）どこにおとまりなのですか」。イエスは彼らに言われた、「きてごらんさい。そうしたらわかるだろう」。そこで彼らはついて行って、イエスの泊まっておられる所を見た。そして、その日はイエスのところに泊まった。時は午後四時ごろであった。ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。

（もりたに みねお 英米学科）

二〇一四年十一月十七日受理